



その15

楠葉 西忍

—くすばさいにん—

(平成27年 2 月 1 日号—第295号)



楠葉西忍[くすばさいにん]は、室町時代の商人で、応永2年（1395）に生まれました。

西忍の父は、聖[ひじり]という名の天竺[てんじく]人で、足利義満[あしかがよしみつ]の時代に来日し、応安7年（1374）に相国寺[しょうこくじ]で義満と会見しました。聖は、唐人蔵[とうじんぐら]と呼ばれる土倉[どそう]を営んだとみられ、主に商人として活動しました。

その後、交野郡楠葉村の女性を妻とし、二人の間に男の子が生まれました。幼名をムスルといい、長じて母方の里名である楠葉を姓とし、俗名を天次[てんじ]、出家してから西忍と称するようになりました。

聖と楠葉の地を結びつけた事情は明らかではありませんが、楠葉が古代から水陸交通の要衝として栄えていたことや、石清水八幡宮の保護を受けて商業活動を行う楠葉神人[じにん]の存在等があったのではないかと推察されます。



石清水八幡宮本殿

父である聖とともに、西忍は、義満のもと、京都で対外貿易を推進する役割を果たしていたと考えられています。

しかし、次の将軍足利義持[あしかがよしもち]の上意に背いたため、西忍は聖とともに一色[いっしき]氏に預けられ、父の死後によりやく許されて奈良に移りました。

西忍は、そこで興福寺の別当[べっとう]であった経覚[きょうかく]と出会い、興福寺の保護のもと、遣明船による2度の中国渡航など、新たな活動を開始しました。

とくに、享徳2年（1453）の2度目の渡航では、その準備を取り仕切り、費用の調達から、商品の手配、貿易船の借用などにその手腕を発揮したといえます。

こうした経験を通じ、西忍は当時の日本を代表する貿易商人になったと評価されています。